

研究者の横顔			
フリガナ	シロツキ マサヒロ		
お名前	城月 雅大	助成金額	50 万円
ご所属	名古屋外国語大学		
研究テーマ	『最期の旅』は処方できるか:がん終末期患者への観光的介入の臨床的可能性と課題		
1：研究者になろうとしたきっかけ			
<p>研究者になろうと思ったのは、小学生の頃。将来の夢として漠然と「何かを深く探求する人」に憧れていたのを覚えています。当時は今のような研究領域を思い描いていたわけではありませんが、振り返れば、その種はすでに蒔かれていたのかもしれません。私の原点は、都市計画、とりわけ「まちづくり論」にあります。都市計画のルーツには、都市衛生や人々の生命に関わる根本的な課題があります。そうした問題に対し、分野を超えて柔軟に取り組むこと。これが、今の私の研究者としての姿勢につながっています。</p>			
2：助成研究の内容紹介			
<p>本助成で取り組むのは、がん終末期にある患者のQOL(生活の質)を向上させるための「旅の処方」の研究です。観光に関する研究者として、「もう一度あの場所に行きたかった」「思い出の景色を見たい」と語る患者やご家族の声に出会い、それを叶える方法を模索してきました。現在は、VR技術を活用して、故郷の風景や思い出の旅行地を仮想的に体験できるプログラムを開発中です。</p> <p>この研究は単なる技術導入ではなく、終末期においても「人生を語り直す」こと、「希望を持ち続ける」ことができる環境づくりを目指しています。分野を横断しながら、医療現場との協働、VRの専門家との連携を通じて、患者の尊厳を支える新たなケアの選択肢を創出していきたいと考えています。</p>			
3：2の将来に繋がる結果予想・目標			
<p>本研究は、がん終末期ケアに「観光的介入」という異分野的アプローチを導入することで、人生の最終段階におけるケアのあり方を根本から問い直すものです。将来的には、医療者が“旅を処方する”という選択肢を、臨床現場のスタンダードとして社会に定着させることを目指します。</p> <p>また、VRを用いた観光体験によって患者のQOL・食欲・希望・語りがどう変化するかを可視化・評価し、エビデンスベースの支援モデルを構築します。そこから、“人生最終章にふさわしい体験”を医療・福祉・文化政策の一部として制度化することを視野に入れています。</p> <p>さらに中長期的には、VRや観光を活用したQOL支援の国際共同研究を推進し、「旅と医療の融合」という新たな学際領域を確立する足がかりとします。“死を待つケア”から“人生を締めくくる体験の創出”へ。本研究がその転換点となることを目指しています。</p>			
4：全国のリレー・フォー・ライフ関係者に一言メッセージ			
<p>このたびは温かいご支援をいただき、心より感謝申し上げます。がんと向き合うすべての人々の想いを、未来につなぐ力に変える。そんなリレーのバトンを受け取り、私も自分のフィールドから挑戦を始めます。</p> <p>私はこれまで、都市計画や観光といった一見“医学とは縁遠い”分野で研究を続けてきました。けれど、現場で出会った「もう一度旅がしたい」という終末期患者の声が、私を医療の世界へと引き寄せました。だからこそ、医学・観光・文化といった分野の境界線にこだわらず、“いま目の前にある課題”に全力で挑みます。</p> <p>医学の常識を少しでも揺さぶり、「旅を処方する医療」が当たり前になる未来を目指して。これからも共に、希望をつなぐ一歩を踏み出していければ幸いです。</p>			